慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	N. ゴーゴリ「ディカーニカ近郷夜話」に見るウクライナとフォークロア
Sub Title	Ukraine and folklore in N. Gogol's «Evenings on a farm near Dikanka»
Author	熊野谷, 葉子(Kumanoya, Yoko)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2023
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 言語・文化・コミュニケーション (Keio University Hiyoshi review. Language, culture and communication). No.55 (2023.) ,p.101- 120
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032394-20231231-0101

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

この著作物は著作権法によって保護されています／ This content is protected by the Japanese Copyright Act

〔研究ノート〕

N.ゴーゴリ「ディカーニカ近郷夜話」に見るウクライナとフォークロア

熊野谷葉子

はじめに

2022年2月24日に始まったロシアによるウクライナ侵攻は，言うまでもなく日本のロシア研究やロシア語教育に携わる者に重大な衝撃と苦痛を与えた。加えて重くのしかかってきたのが，この状況下でロシア語教育やロシア文化研究を行うことの意味づけ（言い訳）と，ウクライナ語・ウクライナ文化研究／教育を行う必要性である[1)]。もっともこうした課題は2014年のウクライナ政変時から研究者間では意識されており，更に言うなら1991年のソ連崩壊以降，ロシア研究の枠内でウクライナを語ることはできない（許されない）という認識はあった。だからといってこの30年で自律的なウクライナ研究が一気に進展したわけではない。それは，ウクライナ語が東スラヴ語に属しているとはいえ，ロシア語とは語彙的な隔たりが大きくロシア研究者といえども習得が簡単ではないこと，ウクライナ領域内の文化的差異が大きく，論じるのが複雑であること，そして何より，ウクライナ人とのロシア語でのコミュニケーションに何ら不自由がなかったことによる。

そんな中で注目が高まっていたのが，ロシア語で書いたウクライナ生まれの文豪，ニコライ・ゴーゴリ（ウ Микола Васильович Гоголь，露 Николай Васильевич Гоголь: 1809–1852）の初期作品群である。ゴーゴリは，日本では特に「外套」（1842），「鼻」（1836）といった短編小説，風刺的な戯曲「検察官」（1836）などで知られるが，現在のウクライナ中部にあたるポルタワ県ミルゴロド郡ソロチンツィ郷の小地主の家庭に生まれた。1828年に作家をめ

1） この課題への対応の一例をあげれば，日本ロシア文学会はホームページ（https://yaar.jpn.org/?cat=9）上に「ロシアの言葉・文学・文化を今，あるいはこれから学ぶ皆さんへ」というメッセージを発表し，ウクライナ情勢関連記事を掲載しているほか，2022年9月には日本ロシア語教育学会と合同で公開シンポジウム「日本におけるこれからのロシア語・文学・文化教育―多言語・多文化共生と教育のポリティクス」を共催している。

ざしてロシア帝国の首都サンクト・ペテルブルグに出たが，処女作の長編詩『ガンツ・キュヘリガールテン』は不評で，失望したゴーゴリは自ら書店から本を回収，焼却している。その後，首都の読書界で故郷「小ロシア」[2] への関心が高かったことから，ゴーゴリは郷里を舞台としその風俗を盛り込んだ短編小説を執筆し，4 編を収録した『ディカーニカ近郷夜話』の第一部を 1831 年に，第二部 4 編を 1832 年に出版した。

『ディカーニカ近郷夜話』はロシア語で書かれている。そこに描出されたウクライナの美しい風景や賑やかな婚礼，湯気の立つような郷土料理に美しい若い男女，豪放磊落なコサック，ジプシー[3] やユダヤ人，悪魔や魔女の跋扈するフォークロア的な世界，民衆的な笑い，といった懐かしさと異国趣味の入り混じった物語世界は，同時代のロシア人から好意的な評価を受けた。ゴーゴリより 10 歳ほど年上の詩人アレクサンドル・プーシキン（1799–1837）は「これこそほんとうのおかしみ，心からの，なに遠慮するところないおかしみです。（中略）それでいてところどころなんという詩，なんと細やかな感受性でしょう！」[4] と激賞したと言われる。同時代の高名な批評家ヴェッサリオン・ベリンスキー（1811–1848）もこの作品に「機智，陽気さ，詩情，民俗趣味」が横溢している点を評価した[5]。好評を受けてゴーゴリはさらに 1835 年には続編と称して「タラス・ブーリバ」を含む 4 編の小説から成る『ミルゴロド』を出版している。

もっとも，これら初期のウクライナものへの後代の評価は，後期作品に対する評価よりかなり低い。ウラジーミル・ナボコフ（1899–1977）は作家論『ニコライ・ゴーゴリ』の中で「プーシキンの讃辞はこんにちわれわれには幾分大袈裟すぎる」とし，「このオペラ風の伝奇物語，気の抜けたファルス」が「多くの軽率な評価を生んだ責任は地方色にある」と，『ディカーニカ近郷夜話』のウクライナ色じたいを批判している[6]。実はこうした低評価はゴーゴリ本人にすでに見られ，1842 年に作品集を編むにあたって作者はこれらを「読者のまともな注意に値しない習作にすぎない」「寛大な読者は第一巻（筆者注：『ディカーニカ近郷夜話』を指す）をまるごと飛ばして，第二巻（同：『ミルゴロド』を指す）から読み始められても差し支えない」と言っている[7]。

こうした低評価には，実は，我々現代の読者にもうなずけるところがある。『ミルゴロド』はともかく『ディカーニカ近郷夜話』収録の 8 話は，何人もの語り手による挿話が入れ子構造

2） 帝政ロシアにおける現在のウクライナに相当する地域の呼称。

3） 自称は「ロマ」だが，本稿では依拠する『ディカーニカ近郷夜話』（『ゴーゴリ全集 1』，河出書房新社，1977 年）とのずれを避けるため「ジプシー」を用いる。なお，本稿における地名表記も基本的に『ゴーゴリ全集 1』に従う。

4） ウラジーミル・ナボコフ，青山太郎訳『ニコライ・ゴーゴリ』，平凡社，1996 年，p. 53。

5） 『ゴーゴリ全集 1』河出書房新社, 1977 年, p. 432（青山太郎による「ディカーニカ近郷夜話」解説）。

6） ナボコフ『ニコライ・ゴーゴリ』p. 54。

7） 『ゴーゴリ全集 1』p. 432。

になっており，またしばしば，さも面白いだろうと言わんばかりのドタバタ劇が本筋を分断しているために，正直なところ小説としてはかなり読みにくい。が，その一方で，時折挿入される一幅の絵画のような情景描写や，跋扈する魔女や妖怪たちの魅力は捨てがたく，それゆえか，これを舞台化，映画化しようという試みは極めて多い。特に有名なものをあげれば，モデスト・ムソルグスキーにはオペラ《ソローチンツィの定期市》（1874–1880）があり，有名な《はげ山の一夜》の原曲が使われていることでも知られる[8]。ソ連の初期カラー映画「ソローチンツィの定期市」（ニコライ・エック監督，1938 年）はキエフ映画スタジオが撮影し，全編ウクライナ語で，原作にはない人形芝居ヴェルテプの場面が長々と挿入されているのも面白い。『ミルゴロド』からは，日本でも「ヴィイ　妖婆死棺の呪い」という邦題で知られる「ヴィイ」の映画化（アレクサンドル・プトゥシコ監督，1967 年）もある。21 世紀になってもこれらゴーゴリのウクライナものは愛され，コサック親子の相克を描いた「タラス・ブーリバ」(ウラジーミル・ボルトコ監督，2009 年，ロシア・ウクライナ・ポーランド合作)，ゴーゴリ本人を「魔界探偵」に仕立て多くの作品の印象的なモチーフをつなぎ合わせ上げた「ゴーゴリ」三部作（エゴール・バラノフ監督，2017，2018，2018）もロシアではヒットした。

つまり『ディカーニカ近郷夜話』および『ミルゴロド』は，ゴーゴリがロシア語で，ウクライナ的なものや民衆的なものを全面に出して書いた物語群として，今もなおウクライナ人，ロシア人をはじめとする多くの読者に愛されているのである。これらの物語に見られるモチーフの大半はゴーゴリの創作であると思われるが，作品を通じてウクライナの事物に触れ，またゴーゴリがどのようにウクライナを，その民衆世界を描き出したのかを読み取ろうという読み方も可能である。筆者はそう考えて，2022 年度に担当した慶應義塾大学法学部設置科目「人文科学特論」を「N. ゴーゴリの作品に見るウクライナとロシアの民衆文化」と題し，『ディカーニカ近郷夜話』を春秋それぞれ 15 名程度の学生とじっくり読むことにした。講義形式ではなく，履修者が持ち寄った情報を共有し，検討しつつディスカッションするというゼミ形式の授業で，春学期には『ディカーニカ』の第一部 4 編を読み，秋学期には第二部から 2 編を読んだ。本稿では，第一章で，この授業の進行上の特徴と成果について報告する[9]。第二章ではあらためて，ゴーゴリが『ディカーニカ近郷夜話』においてウクライナおよびフォークロアをどのように描出しているのかを例示し，作品理解の一助としたい。

8）伊東一郎「聖ヨハネ祭前夜の魔女の饗宴―「はげ山の一夜」をきく」『月刊みんぱく』2000 年 2 月，pp. 14–16。

9）この授業については，2022 年 5 月にウクライナ共和国ポルタワ国立教育大学で行われた第十五回国際ゴーゴリ学会でも本稿筆者が報告している（Yoko Kumanoya. *Studying Ukrainian Culture through the Reading of M. Gogol's Evenings on a Farm Near Dikanka*. 15th International Scientific and Practical Conference «Gogol Readings», held on May 11–12, 2023 at Poltava V.G. Korolenko National Pedagogical University）.

1. 『ディカーニカ近郷夜話』を読む

1-1. 「ノート」の共有とディスカッション

2022 年度人文科学特論「N. ゴーゴリの作品に見るウクライナとロシアの民衆文化」の授業は毎週月曜日の 4 限，日吉キャンパス内の教室で行われた。授業中は教室前方のスクリーンに資料や後述する「ノート」を投影し，教師と学生が必要に応じて発言し議論する。授業は週一回だが，作品を読み，資料を探す作業は授業外の時間で行わなければならない。講師（筆者）は，システム（keio.jp）のドライブ（Box）上にフォルダ「2022 人文科学特論『ディカーニカ近郷夜話』研究」を作成し，履修者全員をこのフォルダの「編集者」として招待した。これをクラス全体のワークスペースとし，その中に以下のように数個のフォルダを設置，その中に各種ファイルを作って履修者は誰でも更新できるようにした。

フォルダ《2022 人文科学特論「ディカーニカ近郷夜話」研究》
- フォルダ《第一部ノート》
  - 「まえおき」について .docx
  - 「ソロチンツィの定期市」について .docx
  - 「イワン・クパーラの前夜」について .docx
  - 「五月の夜，または身投げした娘」について .docx
  - 「消えた手紙」について .docx
- フォルダ《第二部ノート》
  - 「まえおき」について .docx
  - 「降誕祭の前夜」について .docx
  - 「恐ろしき復讐」について .docx
- フォルダ《資料》
  - PDF ファイル／画像ファイル／文書ファイル　等
- Excel：ディカーニカ研究 .xlsx
  - Sheet 1 ゴーゴリ関連文献／ Sheet 2 ゴーゴリ関連サイト／ Sheet 3 ウクライナおよびロシア文化関連文献／ Sheet 4 ウクライナおよびロシア文化関連サイト／ Sheet 5 ゴーゴリの作品に基づく映画・舞台等／ Sheet 6 その他関連情報

フォルダ《第一部ノート》《第二部ノート》に入っているのは何の変哲もない word 文書だが物語一話につき 1 つ用意され，履修者全員がオンラインで共有し更新することができる。こ

こにはあらかじめ講師が作品について簡単な質問を並べておき，授業時までに学生たちは質問への回答を自由に書き込んで署名する。人の書いたものを消してはならないが，反対意見や別の情報をつけ足していくのは自由である。自分の書き込んだ内容については，授業中に口頭でも説明する。この「ノート」は，箇条書きの質問数十行から始まって，一作品を読み終わる時には画像やURLをふんだんに貼りこんだ数十ページの文書ファイルとなった。

フォルダ《資料》は，ダウンロードした論文やスキャンデータなど「ノート」に貼るには重すぎる資料を共有するフォルダである。「ディカーニカ研究.xlsx」はエクセルファイルで，6枚のシートから成り，学生が参照した文献や参考サイトのURLなどを書きこんでいく。いずれのファイルも記入したら署名することになっており，ノートと合わせて，署名の数は学期末の成績評価に直接影響する。

1-2. 情報の共有と検討

実際に「ノート」を使って学生たちがどのように情報を共有し，検討したかを見ておこう。第一部「イワン・クパーラの前夜」のノートに講師が書いた最初の質問は次のようなものである。

・イワン・クパーラとは？
・最初の2頁の語り手は誰？
・「フォマー・グリゴーリエヴィチ」って誰？前にはどんな形で登場した？
・白パン「ブハンチ」буханци пшеничные
・芥子粒せんべい　マコヴニキ　маковники

学生たちはこれに対して，それぞれの質問の下に回答を挿入していった。

最初の質問への最初の答えは「イワン・クパーラ祭―夏至の祭り」というシンプルなものであった。これは共通テキストとして読んでいた翻訳[10]の訳者注を書き写したものである。同じ質問に対する次の回答は「イワン・クパーラ祭はスラヴの伝統的な祝日，異教の神に祈り，スラヴの精神を守る祭…」と25行ほどあった。これは日本語で書かれたロシア政府系の情報サイト「ロシアビヨンド」から引いてきた記述である。「ロシアビヨンド」は多岐に亘る話題を各国語で発信しているため利用しやすく，その後もしばしば参照されることになる。また別の学生は，この祭日を実際に祝っているウクライナの動画を見つけだしてリンクを張った。さらには，イワン・クパーラが火と関係の深い祭りであると分かったことから「あまり関係ないですが，日本の風習で旅に出る人に火打石で火の粉を打ちかけ，身を清める『切り火』というものがあります」と比較文化的なコメントをした学生もあった。

10）「ディカーニカ近郷夜話」『ゴーゴリ全集1』河出書房新社，1977年。

このように，短く単純な講師からの質問に対し，学生がそれぞれに回答を書き込むことで，情報は共有され，授業中にはその文献やサイトをあらためて皆で閲覧した。その結果，一人で見ていた時には気にならなかったサイトの不健全さや記述の信ぴょう性への疑いなども生じ，複数人で出典を確認することの重要性，ひいては引用に当たって文献名や URL 等を明示することの意味を実感することができたかと思う。回答には履修者本人の考えを書き込むことも推奨されたため，自分の考えと引用とを峻別する必要性も理解されたようである。

1-3. 自動翻訳＋外国語知識による調査の拡大

さて，上記の質問のうち最後の二つは作品中にあった食品名である。翻訳では「白パン」に「ブハンチ」，「芥子粒せんべい」に「マコヴニキ」と仮名がふられていたが，それだけではどんな食べ物かを知るのは難しい。そこで講師が原文のロシア語の綴りを貼り付けておいたところ[11)]，履修者のうちロシア語の読める者がこのロシア語の単語を検索し，ヒットした画像をノートに貼り付けたり，露和辞典を引いて手堅い情報を書き込んだりし始めた。すると次には，ロシア語の読めない学生も当該の単語をコピー＆ペーストで検索窓に放り込み，それらしいロシア語のサイトがヒットするとまたそこの文章をコピー＆ペーストして自動翻訳にかけ，最終的に日本語にした情報をノートに書き込む，という大胆な調べ方を始めた。

こうした目隠し手探りの調べ方は，学生には面白かったようだが，授業中にスクリーンに映しながら皆で検証すると，やはり当該のロシア語サイトがいい加減なものだったり，自動翻訳の間違いが目立ったり，という問題が発覚した。結局これを検証するためには，サイトのアドレスを共有し，講師やロシア語の分かる者がサイトの原文をチェックする必要がある。この過程で分かったことは，たとえ初修外国語として 1 年ほど勉強しただけであっても，その言語の知識があるのとないのとでは，検索のスピードや情報の確認，検証の可能性に大きな違いが出るということであった。

更に，基礎的な外国語の知識がある状態で自動翻訳を利用しながら調べをすると，利用できる外国語資料の幅が大きく広がり，Wikipedia や各種「まとめ」記事を越えた専門的な文献や，本人の外国語の運用レベルでは本来読めないような難しい記事が利用できることが明らかになった。一例をあげよう。第二部「恐ろしき復讐」では中年のコサックであるダニーロが昔の戦闘を思い出す場面があり，講師は小説の記述から分かる範囲での回答を想定して「ダニーロはいつ頃どこで闘ったのだろう？」と質問した。すると一人の学生が，ダニーロや他の登場人物の台詞に出てくる人名や地名を原文から拾い出し，ウクライナの歴史について書かれたサイト

11） ロシア語原典は以下の版を使用した。*Гоголь Н. В.* Полное собрание сочинений: [В 14 т.] / АН СССР; Ин-т рус. лит. (Пушкин. Дом); Гл. ред. Н. Л. Мещеряков. — [М.; Л.]: Изд-во АН СССР, 1937–1952. Т. 1. Ганц Кюхельгартен; Вечера на хуторе близ Диканьки / Ред. М. К. Клеман. — 1940.（http://feb-web.ru/feb/gogol/default.asp）

などを利用して，ダニーロの参加した戦闘は 1606 年のコサックによるヴァルナ要塞の攻撃である，と特定したのである。さらにこの学生は調査の過程で高名なウクライナの歴史家ミハイロ・フルシェフスキの『ウクライナ・ルーシの歴史』（全十巻，1898–1936）（ウクライナ語）がネット上に公開されていることを発見し[12]，「ヴァルナ要塞攻撃に関して詳しく記載されている。ここから全文が読める。役に立ちそう」と指摘している。

このように「深堀り」が進んだ結果，秋学期の授業では第二部 4 編のうち 2 編しか読むことができなかったが，その分濃密な読書体験になったように思われる。次章以降は本論に立ち返り，『ディカーニカ近郷夜話』ではどのようにウクライナとフォークロアが描かれているかを見て行きたい。

2. ゴーゴリの描出したウクライナ

2–1. 語彙集

『ディカーニカ近郷夜話』は第一部も第二部も「蜂飼ルドゥイ・パニコー」が地元ディカーニカ村とその近郷で聴き集めた話を編纂・出版したという体裁になっている。各部の最初には数ページの「まえおき」があるが，これは語り手パニコーによる読者への呼びかけであり，まえおきの末尾にはパニコーの署名に続いて「どなたにとってもわかりやすいとは言いかねる言葉を，次にアルファベット順に書き出しておきましょう」として，第一部には七三語，第二部では五六語の語彙集が付されている。この語彙集は日本語訳では省略されているが，実はこれこそゴーゴリがロシア語読者にとって「わかりやすいとは言いかねる」，つまりウクライナ独特と見なした語彙であり，この語彙集じたいが作品に郷土色を付与する効果を狙っていると言える。そこで，以下に全語彙とパニコーによる語義説明の翻訳を掲載する。第一部と第二部で重複する語彙は，第一部の方に＊をつけ，第二部からは削除し，語義説明はより詳しいものを翻訳した。（　）内は本稿筆者による補足注である。

2–2. 食について

語彙集にも多く収録され，本文中でも印象的なのが，食に関する記述である。今もウクライナのソウルフードとして知られるワレニキ（肉や野菜を包んだ皮の厚い水餃子のようなもの）やハルシキ（すいとんのような小麦粉の団子），様々な名前を持つパンや焼き菓子が随所に登場する[13]。そもそも全体の語り手パニコーの妻が無類の料理上手という設定で，彼女は，家

12）Миїайло Грущевский «Історія України-Руси»（http://izbornyk.org.ua/hrushrus/iur.htm）

13）『ディカーニカ近郷夜話』における食べ物については，中村喜和「ゴーゴリと食卓の情景」『週刊朝日百科　世界の食べもの 37　ロシア 2　ウクライナ，カフカス』1981 年，pp. 4–179〜4–181 が豊富な写真と共に紹介している。

単語	パニコーによる語義説明（熊野谷補注）
Бандура	楽器，ギターの仲間（バンドゥーラ）
Батог	鞭
Болячка	るいれき（頸部リンパ節結核）
Бондарь	桶屋
Бублик*	円いクレンデリ，バランチク（やや大きい輪型パン）
Буряк	ビーツ
Буханец	小さいパン
Винница	ウォッカ蒸留所
Галушки*	小麦団子（ハルシキ）
Голодрабец	貧乏人，貧農
Гопак, Горлица*	小ロシアのダンス
Дивчина*	若い娘（単数）
Дивчата	若い娘たち
Дижа	桶
Дрибушки	細かい三つ編み（複数）
Домовина	棺
Дуля	馬鹿握り（親指を中指と人差し指の間から出す）
Дукат*	首から下げるメダルの一種
Знахор	物知り，呪術師
Жинка*	妻
Жупан	カフタンの一種（カフタンは丈の長い上着）
Каганец*	陶片で作った灯明皿の一種で，脂を入れて使う
Клепки	桶の一部だった凸型の板
Книш*	焼きパンの一種，ふつう熱々にバターを塗って食べる
Кобза	楽器（コブザ）
Комора*	納屋
Кораблик*	かぶりもの
Кунтуш	昔からある上着
Коровай	婚礼で出すパン
Кухоль*	陶器のジョッキ
Лысый дидько	家霊，悪魔（直訳すると「禿爺さん」）
Люлька*	パイプ
Макитра	芥子をすりつぶす壺
Макогон	芥子をすりつぶす杵
Малахай	鞭
Миска	木製の皿
Молодица	既婚女性

単語	パニコーによる語義説明（熊野谷補注）
Наймыт	雇われ労働者
Наймычка	雇われ労働者（女性）
Оселедец	耳に巻き付けている頭髪の長い房
Очипок	チェペツ（女性・子供用頭巾風帽子）の一種
Пампушки	こねた生地から作る食べ物
Пасичник	養蜂家
Парубок*	青年
Плахта*	女性の下半身用衣服
Пекло	地獄
Перекупка	女性の売り子，商人
Переполох*	驚き，驚愕の発作。「ペレポロフを流す」とは，すなわち「驚愕の発作を鎮める」
Пейсики*	ユダヤ人の巻き毛（こめかみから垂らした長い髪）
Повѣтка	納屋，物置小屋
Полутабенек	絹地
Путря	粥のような食べ物
Рушник	手ぬぐい
Свитка*	半カフタンの一種
Синдячки	細いリボン
Сластёны	プィシュキ（ドーナツのような揚げ菓子，焼き菓子）
Сволок	天井近くの梁や桁
Сливянка	すもも酒
Смушки	羊の毛皮
Соняшница	腹痛
Сопилка*	フルートの一種
Стусан	げんこつ（での一撃？）
Стрички	リボン
Тройчатка	三重の鞭
Хлопец*	若者，男の子
Хутор	小さな村
Хустка*	ハンカチ
Цибуля*	ねぎ，たまねぎ（第二部では綴り Цыбуля）
Чумаки*	馬でクリミヤに塩と魚を求めて行く人たち
Чуприна, чуб	頭髪の長い房
Шишка	婚礼に焼かれる小さなパン
Юшка	ソース，どろっとしたもの
Ятка	テントや天幕の一種

第二部語彙集（第一部と重複する語を除く）

単語	パニコーによる語義説明（熊野谷補注）
Баштан	スイカやメロンを植えた場所
Варенуха	スパイスの入った煮たウォッカ
Видлога	コートに縫い付けられたラシャ製の折りたたみ帽子
Выкрутасы	難しいステップ
Гаман	火打ち金や火打石，海綿，たばこ，時には金などを入れておく紙入れの一種
Голодная кутья	前夜（降誕祭，洗礼祭の）
Гречаник	そば粉から作ったパン
Запаска	女性用の毛織の前掛けの一種
Кавун	すいか
Канупер	草
Кацап	あごひげをはやしたロシア人
Кобеняк	ラシャの上着の一種でフードがついている
Кожух	毛皮長外套
Корж	小麦粉で作った乾いた平パン，しばしば脂つき（脂入り？）
Курень	藁ぶきの掘立小屋
Кухва	樽の上下を逆さにしたような桶の一種
Левада	荘園屋敷（ウサージバ）
Намитка	水分の多い亜麻布で作った女性の白いかぶりもの。端を頭の後ろに回して被る。
Нечуй-вѣтер	草
Паляница	やや平たい小さめのパン
Пекло	地獄
Петрови батоги	草
Пивкопы	25 カペイカ
Пыщик	小さな笛
Покут	聖像画の下の場所
Полутабенек	古くからある絹地
Скрыня	大きな木箱
Смалець	羊の脂
Сукня	伝統的な，毛織物製の女性服
Сыровець	パンのクワス
Тесная баба	学校の子供達が教室で遊ぶ遊び。長いベンチにぎゅうぎゅう詰めで座り，一方が他方を押し出そうとする。
Черевики	靴
Швець	靴職人
Шибеник	悪党，ならず者

に集まった男たちの雰囲気が険悪になった時にタイミングよく「ほかほかの焼パンにバターをそえてテーブルに出し」たり，バターが唇をつたって流れるほどたっぷり使われたピローグ（具を包みこんで焼いた大きなパン）を焼いたり，茨の実の入ったクワス（発酵飲料）や乾ぶどうとすももの浸し酒を出したりする。

また，食欲をそそるかどうかは別として，「降誕祭の前夜」では，悪魔と関係があるとされる太鼓腹のコサック，パツュークが，手も使わずに鉢に口をつけてハルシキを平らげるシーンが印象的だ。彼が山盛りのワレニキを一にらみすると，ワレニキは自ら飛び上がってスメタナ（サワークリーム）にどぶんと浸かり，飛び出してパツュークの口に飛び込むのである。

2-3. 服装について

ウクライナの伝統的装いでは，女性は未婚の間は髪を編んでリボンで飾り，結婚すると布で覆うようだ。その様子は，特に「ソロチンツィの定期市」でよく分かる。物語の冒頭，18 歳のパラースカの「頭に結ばれた赤や青のリボンは長いお下げの編髪や野花の花束といっしょに，彼女のかわいらしい頭の上に豪華な冠のようにおさまっていた」。一方，同じ馬車に乗っている継母の「頭は更紗の色づきの頭巾におおわれて」いる。だが物語の最後ではパラースカはグリチコとの結婚が決まり，嬉しそうに「義母さんのでもいいから頭巾（オチーポク）の寸法を測らなきゃ」と既婚女性用の頭巾を試着している。

男性の装いについてもウクライナらしい描写は多い。「イワン・クパーラの前夜」の主人公ペトロは美男子で，村の若い女たちは「ペトロに身長の半外套（ジュパン）を着せて赤い帯をしめさせ，てっぺんだけを粋な青色に染めた黒い子羊皮の帽子を頭にかぶせ，腰にトルコ風のサーベルを吊らせて，片手に鞭をもう片方の手に造作のいい煙管をもたせたら」誰より格好いいだろうと想像する。これは粋なコサックの装いだろう。もっとも実際のペトロは親もなく貧乏な作男で「天にも地にも鼠色の長上着が一着あるきり」でしかも穴だらけなのである。

コサックや農民だけでなく，『ディカーニカ近郷夜話』にはウクライナの多様な民族と職業の人々が登場する。ユダヤ人，ジプシー，ポーランド人，居酒屋の主人，商人，聖職者…彼らの装いや行動についてもそれぞれに特徴的な装いが描かれているが，これらはウクライナの多民族性を表すと同時に，後述する人形芝居「ヴェルテプ」の登場人物を思わせる効果がある。

2-4. 地名について

語彙集には入っていないが，『ディカーニカ近郷夜話』に登場する地名はほとんどがウクライナに実在する場所であり，そのことも地域色を際立たせる効果をあげている。表題のディカーニカ，ミルゴロド，ソロチンツィなどはポルタワ周辺が中心だが，北部の町バトゥーリンやドニエプル右岸沿いのチェルカスィ，ドニエプル下流でコサックの本拠地ザポロジエにも言及がある。「恐ろしき復讐」はキエフ周辺からその西側で話が進行し，コサックの戦う相手も魔

法使いの本拠地もカルパチア山脈の向こうであることから，西ウクライナや西欧の地名が出て来る。作品のウクライナらしさはこのように実在の地名の多用にも見られ，逆に言えば，読者は作品を通じてウクライナの地理を知ることになる。

2-5. ウクライナ語のエピグラフ

『ディカーニカ近郷夜話』は全編ロシア語で書かれているが，一部ふんだんにウクライナ語がつかわれている場所がある。第一話「ソロチンツィの定期市」全 13 章の冒頭におかれたエピグラフがそれである。エピグラフの内容はそれぞれの章の内容に即しており，例えば，多くの人々が荷車で定期市へ向かって進んでいく様子が描かれた第 1 章では

> 家（うち）にいるのは退屈なの，
> わたしをそとへ連れ出して！
> にぎやかに人がざわめき
> 娘たちがおどり跳ね
> 若い衆がたわむれるあの場所へ！　　古謡より [14)]

とある。出典の詳細は記されていないが，ウクライナ・フォークロアの一片で，おそらく陽気な踊り歌だろうと推測がつく。フォークロアからの引用は他 4 つの章にあり，「伝説」「昔話」「諺」「婚礼歌」が引かれている。これらは一八世紀の後半から出版が行われていたウクライナの民謡集や昔話集から引用したものかもしれないし，故郷の母や叔母から聞いたものかもしれない。ゴーゴリが母親へ手紙で「我々小ロシア人の風俗習慣」や「結婚式の詳細な記述」「コリャートカやイワン・クパーラやルサルカについて」知らせてくれと頼み，母親の返事を他の様々な情報とともに自分の『よろずなんでも帳』に書きつけていたことはよく知られている [15)]。

残り 8 章につけられたエピグラフは文学からの引用である。ウクライナ語によるウクライナ国民文学の創始者と言われるイワン・コトリャレフスキー（ウ Іван Котляревський, 1769–1838）の叙事詩「エネイーダ」から 3 つ，同じくウクライナの作家フラーク＝アルテモフスキー（ウ Петро Гулак-Артемовський, 1790–1865）の詩から 1 つ，ゴーゴリ自身の父ワシーリ・ホーホリ（ウ Василь Гоголь-Яновський, 1777–1825）の喜劇「抜け作，または兵士に裏をかかれた女の悪知恵」から 4 つ取られている。これらエピグラフの出典について伊東一郎は，「執筆年代からは『ディカーニカ近郷夜話』第一部の中でもっとも遅く書かれたにもかかわらず，この作品をゴーゴリがこの作品集の冒頭に収録したのは，ゴーゴリがこの作品集全体をウ

14）『ゴーゴリ全集 1』p. 103。

15）伊東一郎「第一章　ゴーゴリとウクライナ・フォークロア」『ガリツィアの森　ロシア・東欧比較文化論集』水声社，2019，pp. 13–34. に詳しい。

クライナ文学との関連において強く意識していたことのあらわれ，と考えられる」[16] と論じている。

一九世紀の前半，ロシア帝国ではウクライナ語はロシア語の方言と見なされ，ゴーゴリ自身は一貫して公用語であるロシア語で執筆した。しかし，彼がエピグラフとして独立した形でウクライナ・フォークロアやウクライナ語文学を引用したことには，生まれ育ったウクライナと一八世紀ウクライナ・バロックへの愛着と敬意が感じられる。

3. ゴーゴリの描出したフォークロア

3-1. 踊りと歌

『ディカーニカ近郷夜話』全八作品には民衆の踊りや歌の場面が随所にある。特にほとんどの話が結婚と関連づけられている『ディカーニカ近郷夜話』において[17]，祝いと踊りの場面は避けられない。「ソロチンツィの定期市」のラストシーンでは，グリチコとパラースカの結婚が決まるや，ヴァイオリンが鳴り，「生まれてこの方一ぺんも笑いを浮かべたこともないような暗い顔をした人々までが，足を踏み鳴らし肩をよじらせた。何もかも旋回し，何もかも踊っていた」[18]。「イワン・クパーラの前夜」や「恐ろしき復讐」における婚礼には，その後起きる不幸の前触れとして不気味な側面があるが，それでも客達が入れ替わり立ち代わりホパックを踊る賑やかな描写はある。

これに対して「消えた手紙」に出て来る踊りのシーンは独特だ。この話で踊りまくるのは，語り手の祖父が森で出会った魔女と悪魔の集団であり，祖父が何とか無事に帰ってくると，今度はその妻である祖母が踊り狂う。彼女はその後も，毎年決まった時期になるとひとりでに踊り出してとまらなくなる。

歌の場面も多い。歌の場合はしばしば歌詞も掲載され，話の筋の展開や人物の描写に有機的に働いている。「五月の夜」では若者レフコがバンドゥーラの弾き語りをよくし，恋人ハーリャや，古い館にこもる水死した女を歌で呼び出す。彼の歌は別の個所では自分の父親である村長をこきおろす武器ともなる。「降誕祭の前夜」では，若者たちが新年の門付けの歌「コリャダー」を歌いながらもらいものをして回るが，この門付けはストーリー展開に重要な役割を果

16) 伊東一郎「第三章　ウクライナ文学史におけるゴーゴリ―『ソローチンツィの定期市』のエピグラフを手掛かりに」『ガリツィアの森　ロシア・東欧比較文化論集』水声社，2019，p. 58。

17) 大野斉子はこれを『ディカーニカ近郷夜話』の持つ神話的特徴の一つとしている（大野斉子「ゴーゴリ『ディカーニカ近郷夜話』の神話論的分析：ゴーゴリのウクライナ性とをめぐるロシアディスクール」東京大学大学院人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学研究室年報«Slavistika»，2016 年，pp. 147–175。

18) 『ゴーゴリ全集 1』p. 145。

たしている。「恐ろしき復讐」で歌われるカテリーナの子守歌は「あらゆる歌がまじりあって」いるもので，彼女の狂気を表現している。さらにこの話の恐ろしい結末部分は，バンドゥーラを弾く叙事詩語りによって語られる。

このように『ディカーニカ近郷夜話』においては，踊りの場面が民衆的な祝祭の雰囲気をもりあげ，あるいは魔女や悪魔の異常さを示して描かれるのに対して，歌の場面はストーリー展開上重要な役割を果たしている。踊りに関してはステップや動きが詳細に描写されることはなく，語彙集にも踊りの種類は「ホパーク（Гопак）」と「ホルリツァ（Горлица）」しかない。他方伴奏楽器の種類は詳細に挙げられていることを考えると，ゴーゴリは，音楽にくらべて民衆の踊りについては詳しく知らなかったのかもしれない。全八話中，歌にも踊りにもまったく言及がないのは「イワン・フョードロヴィチ・シポーニカとその叔母」だけだが，それは，この話の登場人物たちが地元の小地主で，事件がその世界で完結しているからだろう。そしてやはり小地主の息子だったゴーゴリ自身も，民衆の踊りを詳細に書けるほどにはこれらを体験してはいなかったのではないだろうか。

3-2. 悪魔と魔女

『ディカーニカ近郷夜話』の民衆性を特徴づけるもう一つの要素が，各話に必ずと言ってよいほど登場する悪魔や魔女である。これらはウクライナ・フォークロアからの引用というよりは作家が創作した登場人物と位置付けられるべきだろうが，これらの存在が作品にフォークロアの香りを漂わせていることは確かである。

悪魔が間接的に，登場人物の会話の中にだけ出て来るのが「魔法のかかった土地」と「ソロチンツィの定期市」である。前者は，ある土地について語り手の祖父が体験した不思議なできごとについての短い物語である。後者では，悪魔に関する噂話が原因となって定期市で大騒ぎが起こり，それに乗じて主人公たちの企みが進行する。噂話に翻弄される人物たちのドタバタが面白いが，悪魔は実際には登場しない。

一方，悪魔が人の形象をとって現れる例が「イワン・クパーラの前夜」のバサヴリュークで，これは「魔人（бесовский человек）」「人型悪魔（дьявол в человеческом образе）」などと呼ばれている。酒飲みの遊び人で，悪魔であることは皆に知られている。恋人と結婚できずにやけ酒を飲んでいた若者ペトロを誘惑して魔女に引き合わせ，彼を破滅に追いやるバサヴリュークは，魔女と人との橋渡しをする存在である。これに似た立場で「悪魔」と呼ばれる人物に「降誕祭の前夜」の太鼓腹パツュークがいる。彼は前述のように手も使わずににらんだだけでハルシキを口に入れてしまうだけでなく，やってきたワクーラの袋の中に悪魔が入っていることまでお見通しで，やはり異界への番人のようである。

人型悪魔に似ているが一貫して「魔法使（колдун）」と呼ばれているのが「恐ろしき復讐」のカテリーナの父である。変身することができ，冒頭では見事な踊りを見せるコサックから

「鼻は伸びねじれ，爛々と輝く目は褐色から緑色に変わり，唇は青味を帯び，顎は震えだし，槍のようにとがり，口からは犬歯がつき出し，後頭部には瘤がもり上が」った恐ろしい姿になる[19]。どうやらこの姿が彼の本性で，カテリーナの父として娘と娘婿と共に暮らしている時はただの老人である。「恐ろしき復讐」を最後まで読むと，確かにこの老人は呪われた一族の末裔であり，人間であることが明らかになる。

これに対して「降誕祭の前夜」の悪魔は一貫して「チョールト（чорт）」である。チョールトは地獄から出てきて人間に悪さを働き，時に人間に罰せられてまた地獄へ落ちて行く「悪魔」または「鬼」であり，「降誕祭の前夜」では夜空の月を盗んだり，空を飛んだりたりしている。悪魔は鍛冶屋ワクーラを支配下に置こうとして逆にとっちめられ，ワクーラを肩に乗せてペテルブルグまで飛び，女帝エカチェリーナ二世のもとまで送り届けるはめになる。

この場面に関しては，人文科学特論のディスカッションで興味深い指摘がされたので，特筆しておきたい。ワクーラが首都の宮殿まで来た目的は，想い人オクサーナにプレゼントするため，女帝陛下の靴をもらうことだった。ワクーラは拝謁直前のザポロージエ・コサックの一団に紛れ込み，女帝に会うや，その容姿をほめたたえてまんまと靴を賜り，また悪魔の背に乗ってウクライナへ帰ってくる。悪魔はワクーラに三度打擲されて地獄へ逃げかえり，ワクーラとオクサーナは結婚する，という典型的なハッピーエンドである。だが「本当にそうか？」と疑問を呈した学生がある。ワクーラの飛び入りはザポロージエ・コサックと女帝との会談を妨害し，コサック達は女帝への陳情を果たせなかった。それを行わせたのは実は悪魔だったのではないか，というのである。確かに，歴史的に見るとエカチェリーナ二世はザポロージエ・コサックの宿営地を廃止するなどコサック解体を進めた人物であり，この時のコサックの拝謁の目的はそれを阻止することだっただろう。ワクーラの身勝手で唐突な行動は，ワクーラ一人の幸せにはつながったが，コサック全体の幸せを阻害するものでもあったのである。ワクーラという人物は，その鍛冶屋という職業が悪魔に対して支配力を持つという民間信仰的な側面が指摘されたり[20]，民衆的な率直さ素朴さが権力者を動かしたと肯定的に捉えられたりするのが普通だが，よく考えてみれば彼は魔女ソローハの息子である。そのことに気づくとき，一見明るい結末に見えるこの話全体のトーンには不気味な影が差し，それはゴーゴリの光と陰が絡み合う世界観に見事に一致する。

ゴーゴリの描く魔女についても，いくつかのタイプが指摘できる。一つは人間界に暮らし男

19）『ゴーゴリ全集 1』p. 306.

20）「降誕祭の前夜」における鍛冶屋等のフォークロア的モチーフについてはオリガ・ニコレンコ他の論文を参照（*О.Н. Николенко, Е.С. Николенко* «Традиции украинского фольклора и народная мифология в повести «Ночь перед Рождеством» // Гоголь и традиционная славянская культура. Сборник научных статей по материалам Международной научной конференции. М., 2012. Стр. 78–86.

を味方につけて悪事を働く魔女である。ワクーラの母のソローハはこのタイプで，夫のいない美しい年増女として村中の男を虜にしているが，なぜか話の後半では登場シーンがない。「五月の夜，または身投げした娘」の郡長の娘の継母も人間界で暮らす魔女だったが，生さぬ仲の娘をいびって入水自殺させ，あまつさえ自分も水死した娘たちの一人に化けて，死後も娘に平安を与えない。

一方，「イワン・クパーラの前夜」の恐ろしい人食い魔女は「鶏の脚を持つ小屋」に住んでいるという描写から昔話のバーバ・ヤガーが想起され，人界のものではない雰囲気が濃厚である。対照的に「消えた手紙」に出て来る魔女たちは賑やかで，森の中で「一人残らず酔っぱらいのように妙ちきりんな悪魔の踊りをおどって」おり，おまけに主人公と賭けトランプを始めて見事に負けてしまう。怖いながらも滑稽な魔女である。

これら『ディカーニカ近郷夜話』に登場する悪魔と魔女の諸タイプは，ウクライナ・フォークロアにおける悪魔や魔女の類型とある程度一致するのではないかという予想が立てられるが，それについてはウクライナ・フォークロアを詳細に検討してからでなければ結論を出すことができない。

3-3. 語りとストーリーの型

『ディカーニカ近郷夜話』においてゴーゴリがこだわっていたのではないかと思われるのが，複雑な語りの構造である。特に第一部の 4 作品は共通する構造を持ち，これが第二部や『ミルゴロド』との大きな違いになっている。

前述のように『ディカーニカ近郷夜話』は「蜂飼いパニコー」が自分の家の夜会で交わされた話をまとめたという設定である。「まえおき」のパニコーの言葉によれば，数ある語り手の中でも特に「珍しい物語をする名人」にディカーニカ教会の役僧フォマー・グリゴーリエヴィチがおり，「イワン・クパーラの前夜」「消えた手紙」はフォマーの語りによる。またパニコー宅の夜会には「話の調子がいかにも凝って手がこんでおり，まるで印刷した本に書いてあるような具合」[21] で話す「えんどう色の上着」を着た若旦那がおり，「ソロチンツィの定期市」はこの若旦那の語りであるらしい。残る一篇「五月の夜」については語り手は明示されていない。

4 話に共通する話の構造とは，比較的単純なメインストーリーが語られる中で，悪魔や魔女が関係する話が一つ以上挿入され，さらにメインストーリーに直接関係のないドタバタ騒ぎがあちこちに挿入されている，というものである。これら 3 つの筋（メインストーリー・悪魔や魔女が関係する挿話・ドタバタ騒ぎ）を，それぞれの話の語り手が誰であるかと合わせて一覧すれば次のようになる。【　】内はその部分の語り手を指す。

21）『ゴーゴリ全集 1』p. 99。

「ソロチンツィの定期市」
◎メインストーリー
【若旦那】若いコサック，グリチコが定期市で美しいパラースカと恋に落ちる。パラースカの継母ヒーヴリャの反対を押し切って彼女と結婚したいグリチコは，友人のジプシーの策に乗り，「赤い長上着」伝説を利用してパラースカの父親チェレビークが逮捕されるよう仕向け，自分が彼を救い出すことで結婚を承諾させる。
◎悪魔や魔女の挿話
【二人の商人】市場で悪魔騒ぎが起きている。古い納屋で悪魔がいたずらをし，豚の鼻面が出没，赤い長上着が現れた。この赤い長上着を手にした人の商売は失敗するという。
【チェレビークの教父】悪魔騒ぎの原因。地獄から追い出された悪魔が，やけ酒を飲んで酒場のつけを払うためユダヤ人に自分の赤い長上着を質入れした。悪魔は，質屋がこれを流してしまい，上着が切り刻まれて棄てられたことを知って，断片を探し集めている。残るは左の袖だけである。
◎ドタバタ騒ぎ
【若旦那】ヒーヴリャ，初対面のグリチコと悪口の応酬をし，ついに馬糞を投げつけられる。
【若旦那】ヒーヴリャ，あいびき中に夫たちが帰宅，愛人を天井に隠す。皆が悪魔話をしている最中に豚面が見えて一同パニック，愛人が天井から落ちて来たのに驚いて「悪魔だ！」と皆逃げ出す。

「イワン・クパーラの前夜」
◎メインストーリー
【フォマー】貧乏なペトロは，恋人ピドールカと結婚するためどうしても金が欲しかった。悪魔がペトロを誘惑して魔女にひき会わせ，魔女はペトロにイワン・クパーラの夜にだけ咲く蕨の花を摘ませ，更にピドールカの弟イワシコを殺害させてその血を吸う。ペトロは金持ちになり結婚したが，発狂し，翌年のクパーラの夜に灰になって消えてしまった。ピドールカは尼僧になった。
◎悪魔や魔女の挿話
【フォマー】今から百年ほど前，人間の形をした悪魔バサヴリュークが現れた。さんざん遊んだは，突然地に潜ったように消える。バサヴリュークはペトロを破滅させた後，村の近くに住み続け，子孫もそこに住んだ。
◎ドタバタ騒ぎ：
【フォマー】ピドールカとペトロの婚礼で，客の一人が祖父の叔母にウォッカを浴びせ，他の一人が火をつけた。叔母は着物を脱いで大騒ぎになった。
【フォマー】悪魔バサヴリュークは，居酒屋で羊の丸焼きに変身して客を怖がらせた。また，

盃がお辞儀をしたり，桶が踊ったりした。

「五月の夜，または身投げした娘」
◎メインストーリー
【不定】レフコとハーリャは愛し合っているが，実はレフコの父である村長もハーリャに言い寄っている。レフコは仲間と騒ぎをおこして父をこらしめ，また，入水して死んだ郡長の娘が魔女を見つけるのを手伝ってやり，その礼に代官の手紙をもらった。その手紙には「レフコとハーリャを結婚させよ」とあったため父も従わざるを得なかった。
◎悪魔や魔女の挿話
【レフコ】今は廃墟となっている郡長の館では，昔，郡長の娘が魔女である継母にいじめられて池に入水自殺した。この娘は継母をも池に引きずり込んだが，魔女は水死女の一人に化けて紛れたため，娘は今も魔女を探し続け，魔女を当ててくれる生者を水に引きずり込もうとしている。
【醸造家】自分（醸造家）の姑は放浪者に夕食を与えたが，あまりの大食いぶりに「団子でのどをつまらせればいい」と思ったところ，大食いは本当に窒息してしまった。以来，夜になるたびに姑のもとに死んだ大食いが現れる。
◎ドタバタ騒ぎ
【不定】酔っ払いのカレーニクが村の娘たちにだまされ，自宅と間違えて村長の家に入り込む。
【不定】レフコと仲間たちは村長を揶揄する歌を歌って騒ぎたて，村長に自分の義妹（おそらく愛人でもある）を捕えさせた。

「消えた手紙」
◎メインストーリー
【フォマー】祖父は豪胆なコサックだった。ある時祖父は統領から女帝への手紙を届けるよう命じられたが，途中で手紙を悪魔に盗まれた。祖父は悪魔と魔女の集に乗り込み，魔女とトランプをやって勝ち，手紙を奪還し，気づくと我が家の屋根にいた。祖父は改めて馬を飛ばして女帝に手紙を届け，ご褒美をもらって帰った。
◎悪魔や魔女の挿話
【道中出会ったコサック】自分（コサック）の魂は悪魔に売り渡してある。今夜が約束の期限なので，引き渡されないよう寝ずの番をしてほしい。
【居酒屋の主人】悪魔に出会う方法は以下の通り。暗くなってから森へ出かけ，森から何か音が聞こえてもそちらへは行かずにどんどん進んで川岸まで行く。ポケットには金を沢山入れておくとよい。
◎ドタバタ騒ぎ
【フォマー】魔女たちは祖父の出した金を見て踊り跳ね回る。きたならしく，様々な動物の顔

をしている。
【フォマー】祖父の妻は，祖父が悪魔と会って帰ってきた時，紡錘を両手に握ったまま飛んだり跳ねたりしていた。その後も毎年同じ時期になると踊り出して止まらない。

これらの挿話はしばしば入れ子構造になっており，それが『ディカーニカ近郷夜話』の第一部を読みにくいものにしている。翌年出版した第二部にはこの構造は見られない。ではなぜゴーゴリは第一部でこの構造にこだわったのだろうか。

一つの理由は，作家のフォークロア的な「語り」への執着ではなかったかと思う。彼はどの話も，あたかもパニコーの夜会に集まった誰かが語ったものをそのまま書き留めたかのように書こうとした。だがその一方で，凝った情景描写も入れたいし，ウクライナ語のエピグラフも貼り付けたい。これらの極めて文学的な形式と口承の語りとを融合させるために登場させたのが，語り手と書き手の中間のような「若旦那」だったのではないだろうか。つまり，第一部の語りの構造は，それじたいがゴーゴリの描出したかったフォークロア性なのである。それがあまりうまくいかなかったためか，若旦那は第二部では姿を消している。

もう一つ指摘できるのが，ウクライナや西スラヴで盛んな人形芝居ヴェルテプの影響である。ヴェルテプはクリスマスの時期に演じられる箱入り人形劇で，人形遣いは箱を持ち歩いてキリストの生誕にまつわる芝居を上演する。箱は中央に仕切りがあって一階部分と二階部分から成り，降誕劇など宗教的な芝居，高次元の芝居は二階部分で，民衆的な陽気なバカ騒ぎは一階部分で演じられた。この階層は『ディカーニカ近郷夜話』第一部の構造ときわめて近い。もしこれをヴェルテプにかけるならば，メインストーリーは二階で，悪魔話とドタバタ喜劇は一階で演じられただろう。伊東一郎は，ヴェルテプの登場人物（コサック，女房たち，若い女性，ユダヤ人，ジプシー，悪魔，魔女，鍛冶屋，司祭）と『ディカーニカ近郷夜話』の登場人物の共通性，類型的な描かれ方もふまえ，「ゴーゴリの『ディカーニカ近郷夜話』は基本的にこのヴェルテプの世界を散文の世界に移し替えたもの，と言うことができる」としている[22)]。

おわりに

『ディカーニカ近郷夜話』は，ゴーゴリがウクライナとフォークロアを二本の柱として構成した小説集である。そこに見られるのはゴーゴリが意図的に描出した情景であり，19 世紀初頭のウクライナやフォークロアの姿そのままではない。それでも，ポルタワ生まれのゴーゴリが自分の書き留めた『よろずなんでも帳』から小説に投入した膨大な情報は，現代の読者がイ

22） 伊東一郎「第二章　ゴーゴリ―ウクライナ・バロック―民衆文化。バフチン『ラブレーとゴーゴリ』に寄せて」『ガリツィアの森　ロシア・東欧比較文化論集』水声社，2019，p. 42–43。

ンターネットの海ですくい上げた情報と合わせれば，ウクライナ文化を知る助けになるだろう。小説中に現れた食，服装，地名，およびその他の珍しい語彙の多くは現代のウクライナ文化にもその痕跡を見ることができるし，描かれた歌や踊り，悪魔や魔女は，逆に今日のウクライナ・フォークロアのイメージを形成するもとになったものかもしれない。

ただし，一般の読者がこれらゴーゴリの初期作品を楽しみつつウクライナを理解するためには，もう少し親切な案内が必要であろう。『ディカーニカ近郷夜話』はゴーゴリの作品中でも人気があるとは言えず，日本語での新訳は 50 年近く出ていない。ネット上で簡単に手に入るためによく読まれている翻訳は，1937 年のものである [23)]。日本語も変化しているし，今ならばもっと正確に提供できる情報もある。ウクライナへの関心が高まっている現在，最新の文化を紹介することはもちろん必要だが，この作品に適切な注や図版，地図のついた読みやすい新訳が出ることも，決して無駄ではないだろう。同時に，『ディカーニカ近郷夜話』と『ミルゴロド』を読んだ人が必ず発する疑問―これらのモチーフはどこまでがフォークロアで，どこからがゴーゴリの創作なのか？―に部分的にでも答えるには，基礎的なウクライナ・フォークロアの研究が必要なことは論を俟たない。

【主要参考文献】

青山太郎『ニコライ・ゴーゴリ』，河出書房新社，1986.

伊東一郎『ガリツィアの森　ロシア・東欧比較文化論集』水声社，2019. より．

「第一章　ゴーゴリとウクライナ・フォークロア」

「第二章　ゴーゴリ―ウクライナ・バロック―民衆文化。バフチン『ラブレーとゴーゴリ』に寄せて」

「第三章　ウクライナ文学史におけるゴーゴリ―『ソローチンツィの定期市』のエピグラフを手掛かりに」

伊東一郎「聖ヨハネ祭前夜の魔女の饗宴―「はげ山の一夜」をきく」『月刊みんぱく』2000 年 2 月，pp. 14–16.

大野斉子「ゴーゴリ『ディカーニカ近郷夜話』の神話論的分析：ゴーゴリのウクライナ性とをめぐるロシアディスクール」«Slavistika» 東京大学大学院人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学研究室年報，2016, pp. 147–175.

ニコライ・ゴーゴリ著，太田正一・中村喜和・青山太郎訳『ゴーゴリ全集 1』河出書房新社，1977.

ゴーゴリ作，平井肇訳『ディカーニカ近郷夜話　前篇・後篇』，岩波文庫，1994.

ウラジーミル・ナボコフ，青山太郎訳『ニコライ・ゴーゴリ』，平凡社，1996.

Гоголь Н. В. Полное собрание сочинений: [В 14 т.] / АН СССР; Ин-т рус. лит. (Пушкин. Дом); Гл. ред. Н. Л. Мещеряков. — [М.; Л.]: Изд-во АН СССР, 1937–1952. Т. 1. Ганц Кюхельгартен; Вечера на хуторе близ Диканьки / Ред. М. К. Клеман. — 1940. (http://feb-web.ru/feb/gogol/default.asp)

О.Н. Николенко, Е.С. Николенко «Традиции украинского фольклора и народная мифология в повести «Ночь перед Рождеством» // Гоголь и традиционная славянская культура. Сборник научных статей по материалам Международной научной конференции. М., 2012. Стр. 78–86.

23)　ゴーゴリ作，平井肇訳『ディカーニカ近郷夜話　前篇・後篇』，岩波文庫，1994 年，を底本とした青空文庫版（https://www.aozora.gr.jp/cards/000207/files/47123_35877.html）。